

文科系2大学における2021年度入学生の 情報教育の履修に関する意識調査

篠 政 行*

Survey of the Freshmen in the Academic Year of 2021 on “Informatics Education” Provided by Two Liberal Arts Colleges in Tokyo

Masayuki SHINO*

Abstract

In this paper, we have carried out questionnaire survey to freshmen about the consciousness of “Informatics Education” during high school days since 2010. We have continued to carry out this survey in the Academic Year of 2021 in the humanities departments in universities. As a result, it turned out that the students who do not have good PC environment tend to feel they are bad at PC skills from 1.2 times to 1.4 times as much as the students who have good PC environment. PC literacy and fundamental knowledge about PC have not developed as the teachers expected. In addition, according to the chi-square test relating to the presence/absence of PC, it was found out that there is a connection between the consciousness toward the operation of PC and about a word processor and spreadsheet, PowerPoint. But also it turned out that relevance is not seen at all. The result showed that the fields of weakness are different among two universities.

キーワード：情報教育、コンピュータリテラシー、アンケート、意識調査、情報リテラシー教育

1 はじめに

これまで、教科「情報」に関する調査報告[1][2]は数多くなされ、さまざまな分析が行われてきた。そこで、大学入学前の情報教育に関する意識調査[3][4]を2010年度から2021年度の11年間に渡り駒沢女子大学と文化学園大学の文科系2大学の新生入学生に対して実施してきている。ここでは、2021年度に入学した新生入生に高等学校で教科「情報」を学んだ事柄につ

いて調査結果を報告する。

2020年初頭からの新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行の影響により、令和3年度の授業は令和2年度と同様に4月のスタート時点から大学の授業の多くが遠隔講義で実施された。そのため、本調査もリモート形式(Googleフォーム)で行った。

学習指導要領は概ね10年ごとに改定される。高等学校の「情報科」は2022年度からは情報教

*人間総合学群 住空間デザイン学類

育に関して共通必修科目の「情報Ⅰ」と選択科目の「情報Ⅱ」に再編され両科目ともにプログラミング教育が含まれ高校生全員がプログラミングを学ぶことになる。

現行のカリキュラムでは、「情報」に関連した内容を小・中学校から高等学校に至るまで、少なからず履修し、大学入学以前には十分な情報教育を受け理解度も上がっているはずである。

しかしながら、現実的には新入生が情報の基礎的な知識に乏しい、あるいは大学で通用するレベルには達していないと実感させる新入生がいるという思いが大学の情報科の教員にはある。つまり、高等学校の情報教育の状況と学習指導要領通りの学力を身につけたはずだと大学の教員が持つ期待度の差が、大学の情報教育に影響を与えているという問題点がある。パーソナルコンピュータ（以下PCと記す）に関する基礎技能を身につけるには高等学校の「情報科」では不十分であり、大学で通用するレベルには達していないことになる。新入生の苦手意識はどこから来るものなのかについて報告する。

2 調査方法

調査は2021年度の駒沢女子大学と文化学園大学の文科系2校に入学した1年生のみにリモート形式（Google フォーム）で行った。実施は2021年4月である。概要は次のようである。

2.1 調査対象

2021年度

駒沢女子大学	293名
文化学園大学	329名
合計	622名

2.2 調査方法

Web上の質問紙（記名式Google フォーム）による選択式。

2.3 調査内容

まず、高等学校で学んだ「情報科」について、

- ①教科「情報」を高校の何年生で履修したか。
- ②情報の科目は何を履修したか。

次に、PCの利用について、

- ③PCが自由に使える環境にあるかどうか。
- ④PCの基本操作が得意であるかどうか。
- ⑤具体的な内容（タッチタイピング、ワープロ、表計算、プレゼンソフト）の操作や理解（習熟度）ができているか。

についての5つの点について調査を行った。後半の③～⑤の項目についてはクロス集計〔5〕させながら解析を行った。

3 調査結果

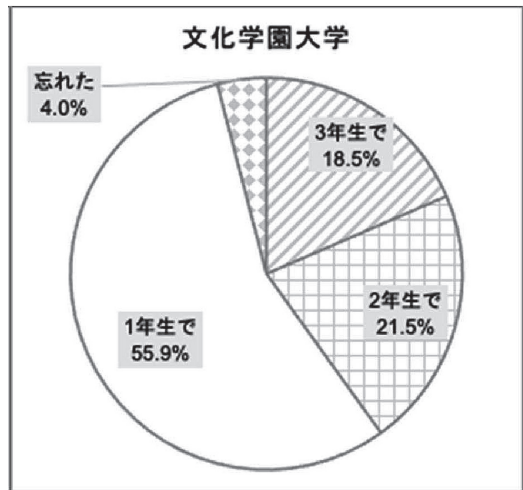
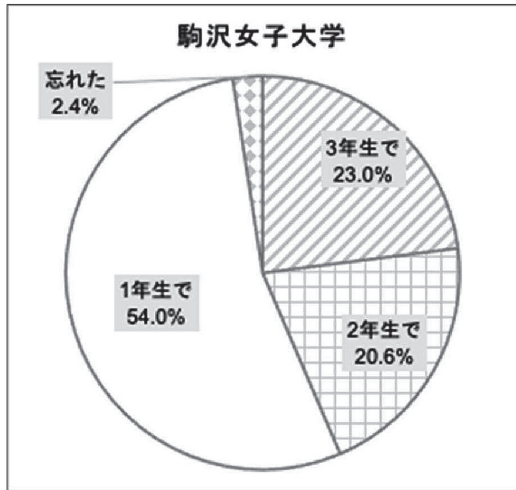
まず、高等学校で学んだ「情報科」について、どのように学んできたのかを調査した。

- ①『教科「情報」を高校の何年生で履修したか』について調べた結果を図1に示した。

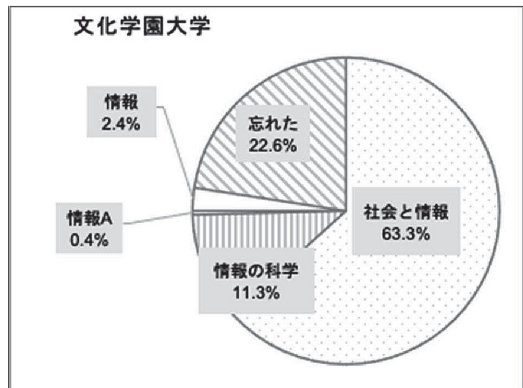
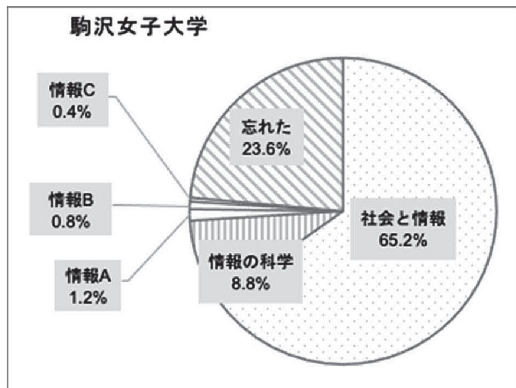
2大学で若干の違いはあるが履修の時期としては、1年次が50%強で、3年次・2年次が共に約20%となっていた。

- ②『情報の科目は何を履修したか』について調べた結果を図2に示した。

前述の履修時期の結果と同様に2大学で若干の違いはあるが、60%強の学生が「社会と情報」を履修していることがわかる。また、「情報の科学」は約10%となった。なお、新指導要領以前の科目名「情報A/B/C」あるいは「情報」と答えた学生もいた。実際には科目として存在するはずはないので、この回答には疑問があるが、それ以上に驚くのは「忘れた」学生が20%以上もいる結果が出たことである。前述の履修時期の結果で約20%の学生が3年次に履修



<図1>



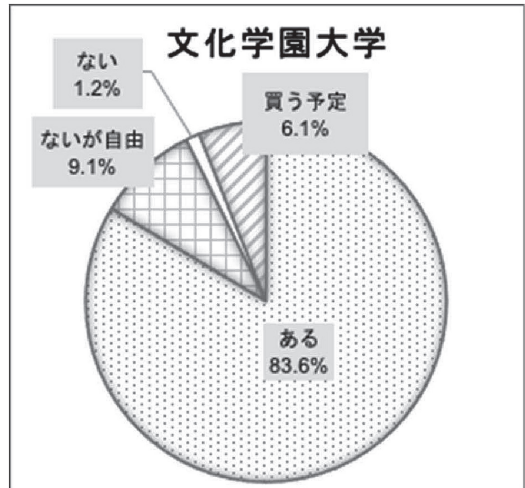
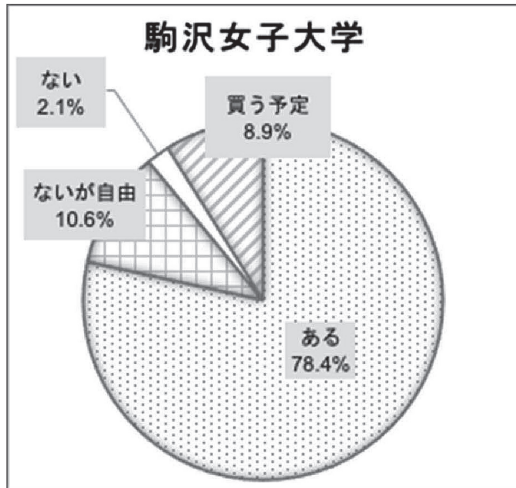
<図2>

していることから、単純に考えると大学入学の直前に履修しているにもかかわらず、自分の履修した科目を「忘れた」ということになる。このことは、教科または情報に対して実質的な授業が行われていないか、極端に印象の薄かった可能性が考えられる。どちらにしても、高等学校での「情報」を学ぶ「目的意識」や「意欲」の低下がこのような要因としてあげられると考えられる。実際には、1年次での受講が圧倒的に多いことで、その後の2年間のブランクが懸念されることから、依然として学生の情報の知識に偏りがあることが予想される。この結果は、調査開始の2010年度より引き続いて同様の傾向

となっている。

つぎに、PCの利用の③『PCが自由に使える環境にあるかどうか。』について、図3に示す。

この結果も2大学で若干の違いはあるもののPCの個人所有率は約80%で、両大学ともに約90%の学生はどうか自由に利用できる環境にあると回答した。なお、ここでの「ないが自由」とは「専用ではないが自由に使えるものがある」ことを意味し、また「買う予定」は「今はないが近々買う予定」としている。このことまでも含めると、100%近くの学生が所有しているこ



<図3>

となる。

そこで、このPC利用環境③『PCが自由に使える環境にあるかどうか。』とPC操作が得意であるか④『PCの基本操作が得意であるかどうか。』の関係を調べた結果を図4に示した。

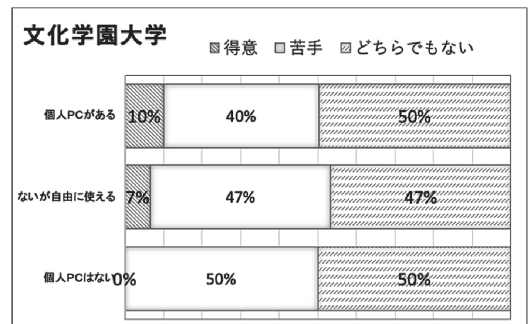
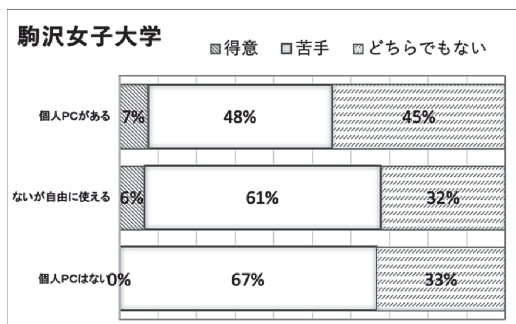
PCを所有する場合は、2大学とも得意と思っている学生、あるいはどちらともいえないと答えた学生は合わせて約半数の50%程度であり、現状においてPC操作が得意であったり、得意と思わないまでも何とか利用していると考えられる。しかし、PCを所有していない学生で苦手であると思っている学生は、駒沢女子大学は

約70%と文化学園大学は約30%の数字を示している。さらに、PCを所有していない学生の苦手意識は、PCを所有している学生が持つ苦手意識に対して、約1.2～1.4倍（駒沢女子大学は約1.4倍、文化学園大学は約1.2倍）である。

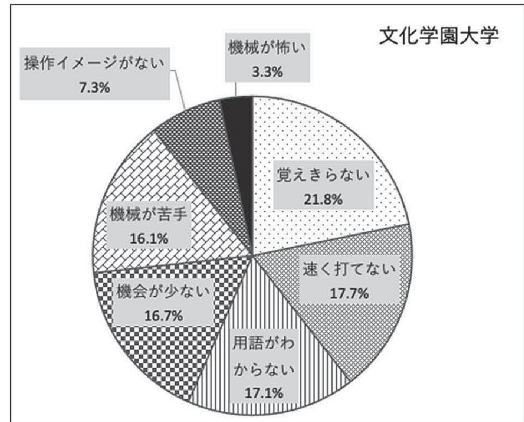
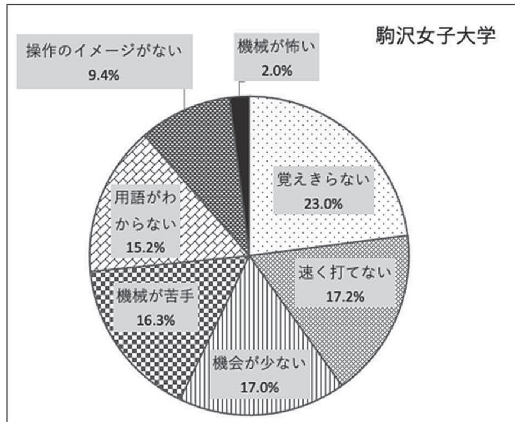
ここまでの調査結果は、2010年度からの調査結果のこれまでの傾向と大きな変化はない。

PCに対して、なぜ苦手意識を持っているのか、その理由を尋ねた結果を図5に示した。

- なお、この図中の解答項目について、
- ・ PCの操作を覚えきらないことを「覚えきらない」
 - ・ タイピングが速く打てないことを「速く打て



<図4>



<図5>

- ない」
- ・用語の意味がわからないことを「用語がわからない」
- ・PCに触れる機会が少ないことを「機会が少ない」
- ・機械が苦手なことを「機械が苦手」
- ・PC操作の次のイメージが見つからないことを「操作イメージが見つからない」
- ・機械が壊れそうで怖いことを「機械が怖い」と表記している。

PCに対する苦手意識の理由は、2大学とも同様の傾向を示している。つまり、「PCの操作方法が覚えきれていない」のは「PCに触れる機会が少ない」ので「PC（機械）そのものが苦手」となり、「機械が壊れそうで怖い」となっていると思われる。そのため「用語がわからない」「操作方法のイメージを持つ」ことも難しくなっている。

次に、PC利用環境③『PCが自由に使える環境にあるかどうか。』と、それぞれ具体的な内容項目の操作や理解度（習熟度）⑤『タッチタイピング・ワープロ・表計算・プレゼンソフトの操作や理解（習熟度）ができていますか。』

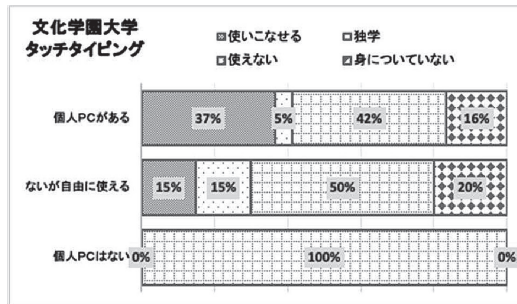
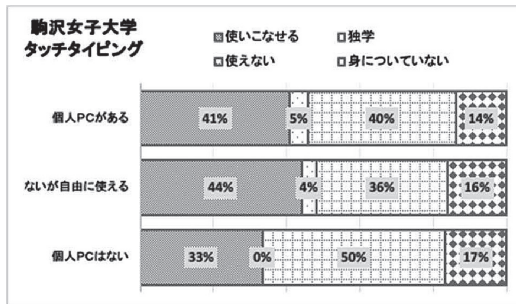
の関係について調べた結果を図6～図9に示した。

この図中の解答項目については、大学入学時までに履修してきた高等学校時の教科「情報」を学んで、どのような意識を有しているかを次のように分類した。

- ・内容を理解していることを「使いこなせる」
- ・教科「情報」では学んではいないが、その内容は他の教科や独学でマスターしたことを「独学」
- ・教科「情報」では学んではいないし、その内容も理解していないことを「使えない」
- ・教科「情報」で学んだが、その内容は理解していないことを「身につけていない」と表記している。

まず、図6ではPC所有とタッチタイピングの習熟度との関係を示す。

タッチタイピングは大学に入学する以前からその操作に習熟していると考えてきたが、大学によっての違いが表れていることがあげられる。駒沢女子大ではPCの有無によってタイピングを「使いこなせる」割合は50%台から30%台へと減少している。反面「使いこなせない」は



<図 6>

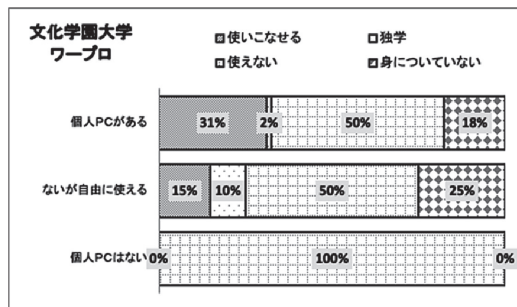
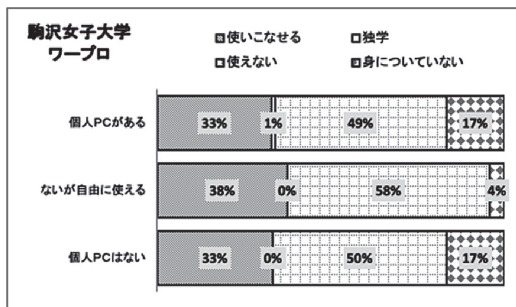
PC 所有の有無の違いでは、予想通り50%台から約70%弱まで増加している。一方、文化学園大学も同様の傾向を示している。つまり、PCの有から無では、「使いこなせる」割合は減少し、「使いこなせない」は増加している。割合で示すと、さらに顕著な特徴が表れている。「使いこなせる」割合は約40%から0%と減少し、「使いこなせない」は約60%から100%へと増加している。

次に、図7ではPC所有とワープロ習熟度との関係を示す。

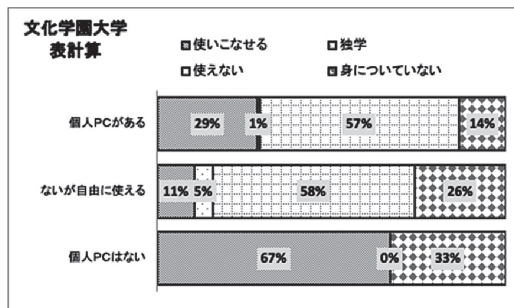
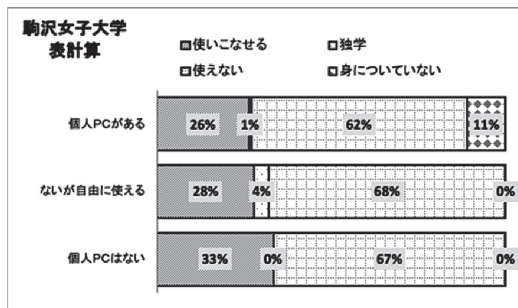
ワープロに関しては大学に入学する以前からその操作に習熟していると考えてきたが、両大学の共通の特徴が表れていることがあげられる。ワープロを「使いこなせる」はPC所有の有無で比較すると、「個人PCがある」から「個人PCはない」に向けて、駒沢女子大学は33%か

ら33%と増減なし、文化学園大学は31%から0%のマイナス31%を見せている。また、「使えない」はPC所有の有無による比較で、「個人PCがある」から「個人PCはない」に向けて、駒沢女子大学は49%から50%のプラス1%の微増、一方、文化学園大学は50%から100%のプラス50%の倍増している。「身につけていない」学生の割合は、駒沢女子大学は17%から17%と変化なし、文化学園大学では18%から0%のマイナス18%となった。この結果から傾向としては、駒沢女子大学はPC所有の有無がそのまま習熟度の意識に反映されていると考えられるが、文化学園大学では「個人PCはない」学生の意識が極端に偏った結果となっている。

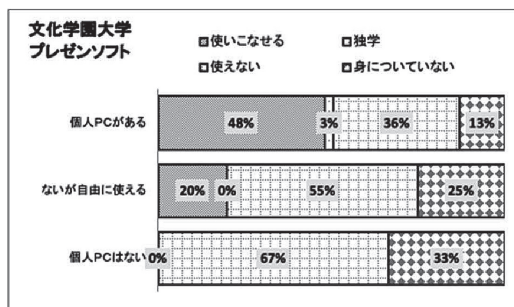
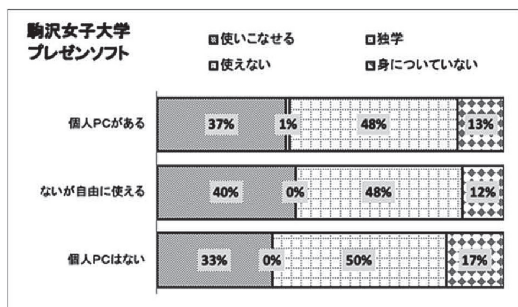
図8の表計算の習熟度とPC所有の関係は、駒沢女子大学はワープロの習熟度と同様の傾向であり、文化学園大学は「個人PCはない」学生の意識だけの違いで、傾向としてはワープロ



<図 7>



< 図 8 >



< 図 9 >

習熟度に近い。

また、図9のプレゼンソフトの習熟度とPC所有の関係もこれまでと同様の傾向が現れている。つまり、「個人PCがある」から「個人PCはない」に向けて、「使いこなせる」と「独学」を合わせて駒沢女子大学は38%から33%の微減、文化学園大学は51%から0%の大幅減少になっている。

表計算とプレゼンソフトのそれぞれについて見ていくと、まず表計算の習熟度とPC所有の関係について、表計算の「使いこなせる」だけを取って比較すると、PC所有の有無の違いでは、駒沢女子大学は「ない」33%から「ある」の26%とマイナス7%、文化学園大学は「ない」67%から「ある」の28%とマイナス39%を見せている。PC所有の有無による変化が駒沢女子大にはその影響は少ないことになり、文化学園大学は大きく反映していることが読み取れる。

ここでのマイナスの値は、意識として「個人PCがある」学生の方が「個人PCはない」に比べ、「使いこなせない」という、不思議な回答となっている。

一方、プレゼンソフトの習熟度とPC所有に関しては、プレゼンソフトが得意な学生はPC所有の有無によって駒沢女子大学は37%から33%の微減、また文化学園大学は48%から0%の48%の大幅な減少である。「身につけていない」学生の割合は、駒沢女子大学は13%から17%の増加となり、文化学園大学は13%から33%の増加となり、両大学ともに同じ傾向が見られた。

上述のように、ワープロ、表計算、プレゼンソフトの習熟に関する意識調査から、基本的なりテラシーを入学前に身につけてきていると思われるがちだが、概ね両大学に同様な傾向が見られた。PCの得手不得手もPCを利用する情報処理に対する「目的意識」や「意欲」の違い

も考えられ、大学の専門性の違い同様に異なってくると思われ、一部に極端な形で両大学の違いが現れている。

さらに、2010年度から2021年度までを通してのデータを以下に報告する。

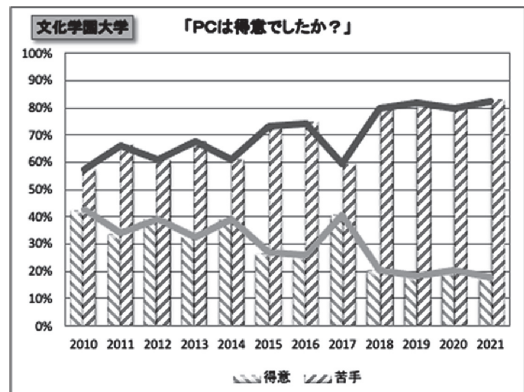
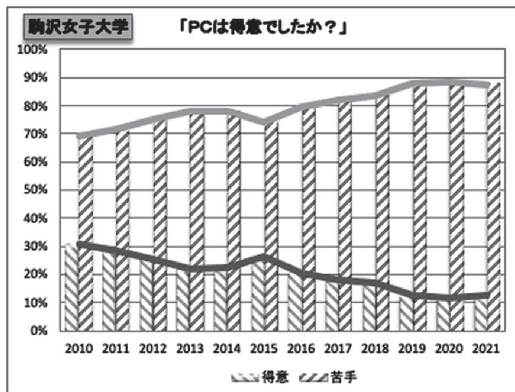
1) 『PCの基本操作に関して得意と思っているかどうか』について調べた結果を<図10>に示した。

この結果から、駒沢女子大学と文化学園大学ともにPCが得意であるという意識を持っている学生は年々減少傾向にある。一方、苦手であるという意識は増加傾向にある。2010年度と2021年度を比較すると駒沢女子大学では、「得

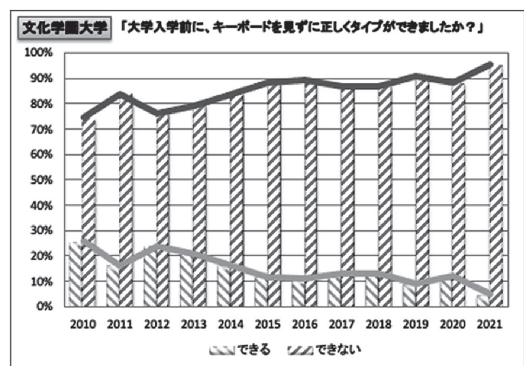
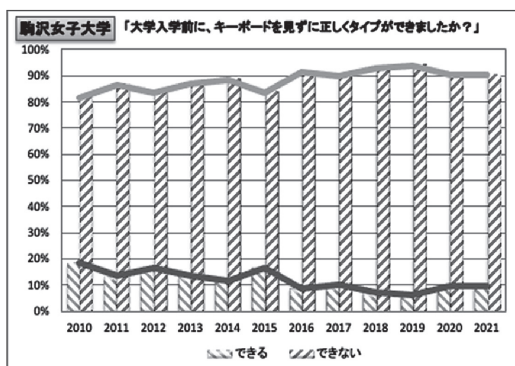
意であるという意識」は18%ダウン（31%から13%）、「苦手であるという意識」は18%アップ（57%から82%）した。また文化学園大学では「得意であるという意識」は25%ダウン（43%から18%）、「苦手であるという意識」は25%アップ（57%から82%）している。つまり、文化学園大学の2017年度を除けば両大学とも同じ傾向を示している。

2) 『キーボード操作』についての操作能力の意識調査を行った結果を<図11>に示した。

駒沢女子大学と文化学園大学ともにキーボードを見ずに正しくタイプできるという意識は年々低下している。一方、キーボードを見ずに



<図10>



<図11>

正しくタイプできないという意識を持っている学生は増加傾向にある。2010年度と2021年度との比較では、駒沢女子大学は、「正しくタイプできるという意識」は8%ダウン(18%から10%)、「正しくタイプできないという意識」は8%アップ(82%から90%)、また文化学園大学では「正しくタイプできるという意識」は21%ダウン(26%から5%)、「正しくタイプできないという意識」は21%アップ(74%から95%)している。

次に、『PCの基本操作に関して得意と思っているかどうか』と『キーボード操作』および『Office系ソフト(ワープロ、表計算、プレゼンソフト)』との操作能力意識の関係性を調査した。

3)『PCは得意でしたか』と『タッチタイピングの操作に関して、どうでしたか』との関係について調べた結果を<図12>に示した。

ただし、カイ二乗(χ^2)検定で、*は5%有意(*: $P < 0.05$)、**は1%有意(**: $P < 0.01$)を表す。以下、図13～図15もすべて同様である。

駒沢女子大学では、ここ数年の傾向として、

得意でも苦手でも使いこなせると思う人の割合は上昇していたが、2020年度と2021年度は逆転した。文化学園大学は得意でも苦手でも使いこなせると思う人の割合は年度によって変化しているので、一律な傾向はみられない。

これらのグラフに近似曲線を当てはめると、駒沢女子大学では、

$$y = -0.0319x + 1.0177$$

文化学園大学では、

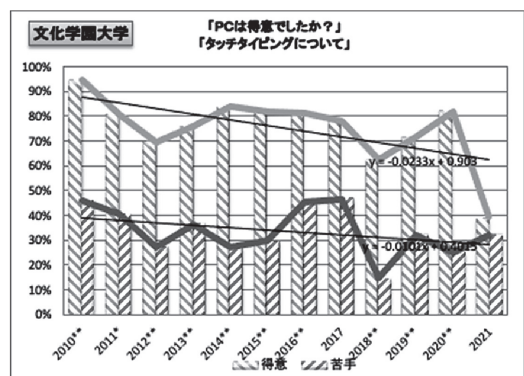
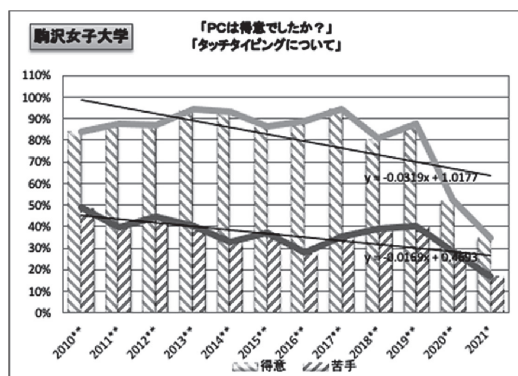
$$y = -0.0233x + 0.903$$

若干の負の勾配を持つことがわかる。つまり、両大学ともともタイピングができるという意識は低下の傾向を示していることがわかる。

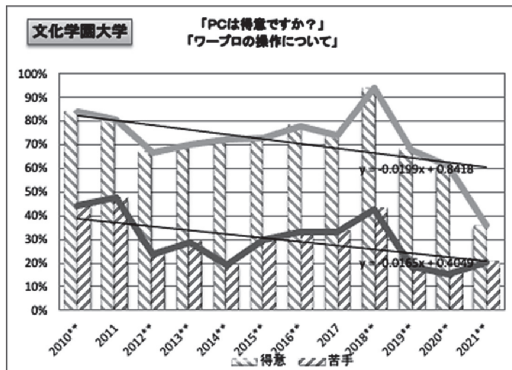
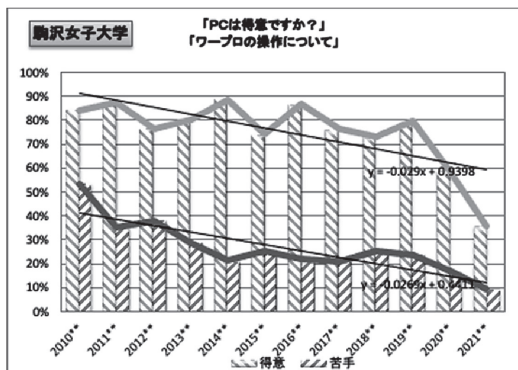
なお、文化学園大学の2017年度の結果は相関の有意差が表れていないので、データからそれを積極的に示唆することはできない。

4)『PCは得意でしたか』と『ワープロの操作に関して、どうでしたか』との関係について調べた結果を<図13>に示した。

駒沢女子大学では、ここ数年苦手でも使いこなせると意識を持っている学生の割合は多少上昇しているが、得意で使いこなせると思う学生は年度によりまちまちである。一方で、文化学園大学は、PCが得意でワープロを使いこ



<図12>



<図13>

なせるという意識を持った学生は年度によっては増加したように見えるが、近似曲線からは、

駒沢女子大学では、

$$y = -0.029x + 0.9398$$

文化学園大学では、

$$y = -0.0199x + 0.8418$$

若干の負の勾配を持つことがわかる。つまり、両大学ともにタイピングができるという意識は低下の傾向を示していることがわかる。

なお、文化学園大学の2011年度と2017年度の結果は相関の有意差が表れていないので、データからそれを積極的に示唆することはできない。

5) 『PCは得意でしたか』と『表計算の操作に関して、どうでしたか』との関係について調

べた結果を<図14>に示した。

駒沢女子大学は、2010-12年度は減少傾向にあったものの2013年度以降は上昇傾向に転じていると推察される。文化学園大学は、2010-2011の調査開始当初は意識が上昇に転じ、現在また減少傾向を示している。得意や苦手に関わらず、使いこなせるという意識を持っている学生はほぼ横ばいである。ここでも、近似曲線からは、

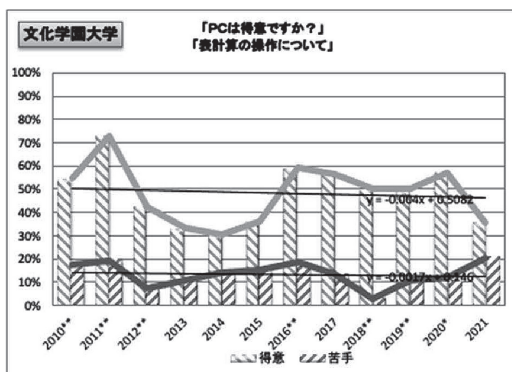
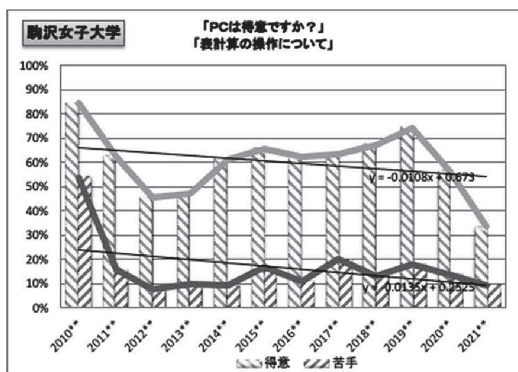
駒沢女子大学では、

$$y = -0.0108x + 0.673$$

文化学園大学では、

$$y = -0.004x + 0.5082$$

ほぼ横ばいで変化は見られない。



<図14>

ただし、文化学園大学の2013-2015年度と2017年度の結果は相関の有意差が表れていないので、データからそれを積極的に示唆することはできない。

6) 『PCは得意でしたか』と『プレゼンソフトの操作に関して、どうでしたか』との関係について調べた結果を<図15>に示した。

駒沢女子大学では表計算との傾向と同様である。近似曲線は、

$$y = -0.0007x + 0.6157$$

ほぼ横ばいで変化は見られない。

さらに、文化学園大学は、苦手を使いこなせる、あるいは得意で使いこなせるというどちらのケースの学生の意識は、全体としては、近似曲線の傾斜はプラスを示している。

$$y = 0.0063x + 0.5654$$

全体としてゆるやかな上昇傾向にあることがわかる。

ここでも、文化学園大学の2016-17年の結果は相関の有意差が表れていないので、データからそれを積極的に示唆することはできない。

両大学とも傾向として、使いこなせる意識がプレゼンソフトについては高いことが伺える。

4 調査データの統計処理 (カイニ乗 (χ^2) 検定)

ここでクロス集計で得られたデータ間に確かに相関関係が成り立っているのかどうかの確証を得るためにカイニ乗 (χ^2) 検定 [6] を行った。

有意水準5%として、カイニ乗 (χ^2) 分布の上側確率 α を求めると、

1. PCの所有と得手不得手について、

$$\text{駒沢女子大学} : \alpha = 0.644736018 > 0.05$$

$$\text{文化学園大学} : \alpha = 0.875784244 > 0.05$$

となるので、

駒沢女子大学では「PC所有と得手不得手には関連があるとはいえない。」

文化学園大学では「PC所有と得手不得手には関連があるとはいえない。」

2. PCの所有とタイピングについて、

$$\text{駒沢女子大学} : \alpha = 0.988955432 > 0.05$$

$$\text{文化学園大学} : \alpha = 0.113030394 > 0.05$$

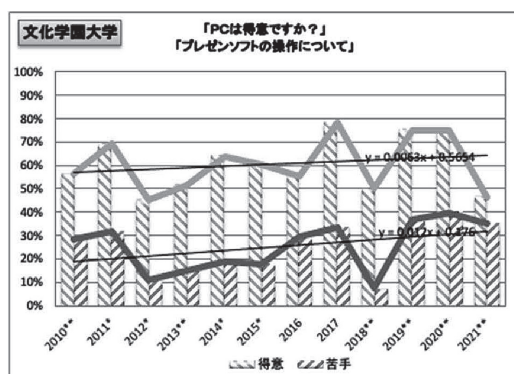
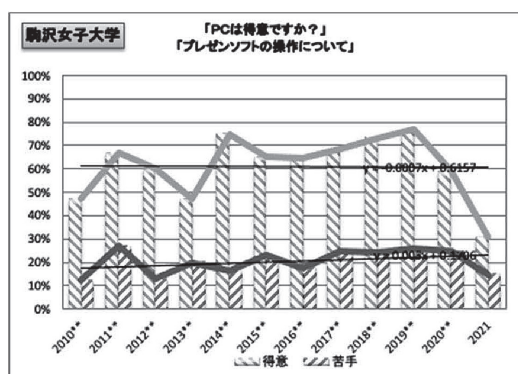
となるので、

駒沢女子大学では「PCの所有とタイピングには関連があるとはいえない。」

文化学園大学では「PCの所有とタイピングには関連があるとはいえない。」

3. PCの所有とワープロについて、

$$\text{駒沢女子大学} : \alpha = 0.80892354 > 0.05$$



<図15>

文化学園大学： $\alpha = 0.097220369 > 0.05$

となるので、

駒沢女子大学では「PCの所有とワープロには関連があるとはいえない。」

文化学園大学では「PCの所有とワープロには関連があるとはいえない。」

4. PCの所有と表計算について、

駒沢女子大学： $\alpha = 0.350492259 > 0.05$

文化学園大学： $\alpha = 0.075360173 > 0.05$

となるので、

駒沢女子大学では「PCの所有と表計算には関連があるとはいえない。」

文化学園大学では「PCの所有と表計算とは関連があるとはいえない。」

5. PCの所有とプレゼンソフトについて、

駒沢女子大学： $\alpha = 0.998051052 > 0.05$

文化学園大学： $\alpha = 0.122549347 > 0.05$

となるので、

駒沢女子大学では「PCの所有とプレゼンソフトには関連があるとはいえない。」

文化学園大学では「PCの所有とプレゼンソフトには関連があるとはいえない。」

以上の計算結果から、

1. PCの所有と得手不得手との関係は、駒沢女子大学と文化学園大学の結果はともに相関の有意差が表れていないので、データからそれを積極的に示唆することはできない。PCが自由に使える環境にある学生とそうでない学生とは苦手の意識が同調しているとは必ずしもいいきれない。

2. PCの所有とタイピングは、駒沢女子大学の結果と文化学園大学の結果からは相関の有意差が表れていないので、所有とタイピング能力には関連はないと考えられる。PCの所有する学生と、そうではない学生ではタイピングの得手不得手の苦手意識はデータからそれを積極的に示唆することはできない。

3. PCの所有とワープロは、駒沢女子大学と文化学園大学の結果ともに相関の有意差が表れていないので、データからそれを積極的に示唆することはできない。

4. PCの所有と表計算の関係性は、ワープロの傾向と同様の推移で、駒沢女子大学と文化学園大学ともに、一概には相関の有意差が表れていないので、データからそれを積極的に示唆することはできない。

5. PCの所有とプレゼンソフトは、ワープロや表計算と同様な傾向がみられる。駒沢女子大学と文化学園大学の結果から、相関の有意差が表れていないので、データからそれを積極的に示唆することはできない。

つまり、PCを自由に使える学生と、そうではない学生の得手不得手の意識は、タイピングをはじめ個々のアプリケーションソフトについては、どれが得意で使えるかの意識は必ずしも定まっておらず、ここでも両大学ともに同様な傾向が表れている。このような傾向は学生個人由来の可能性と両大学での学びの違いが考えられる。大学の持つ特徴を考えると、特に文化学園大学では実習を伴うカリキュラムが多いため、学生は苦手であっても課題をこなしていかなければならないということから、個人の意識が強く反映され相関関係がみられないと考えられる。

5 まとめと課題

2020年に世界的な流行をみた新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で大学の授業の多くが遠隔講義で実施される事態となった。この調査を行なった授業も例外ではなく、オンラインでの実施を余儀なくされたため、例年行ってきたアンケート調査実施に困難を伴った。今年は、タイピングスキルを測る調査が実施できずに、学生個人のリテラシー技能を測る

ことは叶わなかった。

本稿では文科系大学2校について、2021年度新入学生に対して情報教育に関するアンケート調査を実施した。その際、PCを自由に使える環境にある学生と、そうではない学生について調べた結果、そうではない学生のほうが約1.2～1.4倍（駒沢女子大学は約1.4倍、文化学園大学は約1.2倍）の苦手意識をもっていることがわかった。これは、カイ二乗（ χ^2 ）検定で調べた結果からも関連性があることがわかった。ここまでの調査結果は、2010年度より引き続きのこれまでの傾向と大きな変化はない。

また、PCの所有と得手不得手との関係は、両大学ともに確かに関連がありPCが自由に使える環境にある学生とそうでない学生とは苦手の意識が同調している。これについては、カイ二乗（ χ^2 ）検定の結果から関連があるとわかった。

スマートフォンの普及により、「自分専用のPCの所有」について両大学ともに、年を追うごとに「PCを持っていない」が増加している。そのため「使いこなせない意識」や「苦手意識」が年を追うごとに増加している因果関係は十分考えられる。しかしながら、昨今のコロナ禍の状況下においてオンライン授業の実施によりICTを利用せざるを得ない現状や、以下に述べるような文部科学省の提唱した「GIGAスクール構想」[7]のような環境の整備も含めて学生の意識が好転する兆しも本調査の結果に表れていると思われる。

高等学校の情報教育がおよそ10年ごとに改定される学習指導要領で、2022年度からは共通必修科目の「情報Ⅰ」と選択科目の「情報Ⅱ」に再編され両科目ともにプログラミング教育が含まれ高校生全員がプログラミングを学ぶことになる。

さらに、文部科学省はPISA2018の「学校に

おけるICTの利活用はOECD加盟国で最下位」の調査結果[8]を鑑み、2019年12月「GIGAスクール構想（Global and Innovation Gateway for All）」を提唱した。一人一台端末と高速大容量の通信環境を一体的に整備し、Society 5.0[9]の時代を生きる子供たちのために「個別最適化され、創造性を育む教育」を実現させるプロジェクトである。ICTや先端技術を効果的に教育に活用する構想とした。当初目標は2023年度までとしたが、新型コロナウイルスの感染拡大により、環境整備の必要性が急速に高まり、2020年度内の実現に向け前倒して、スタートした。

文部科学省による今後の「GIGAスクール構想」実現へのロードマップを<図16>に示した。

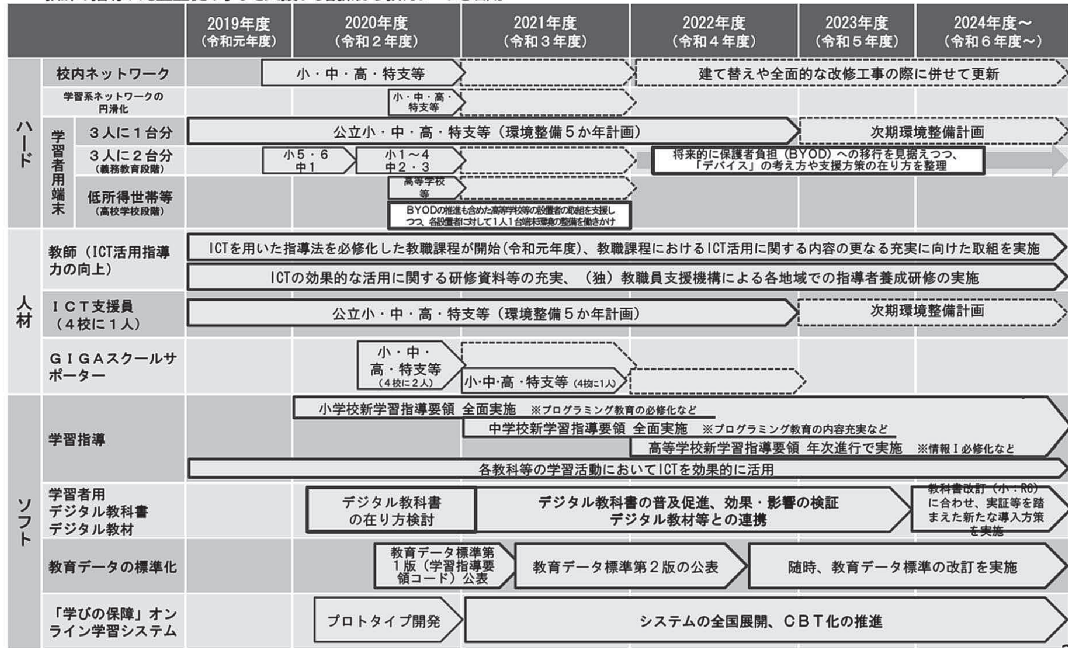
現状での新入学生にとって、スマートフォンの使用（主にSNSなど）は日常的に進む一方、PCの利用は限定的（主に授業など）であり、PC離れが加速されてきたため、これまで約10年間続けて調査をしてきた結果では、顕著な変化の傾向は見られなかった。しかしながら、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、PCを利用するICTへの使用頻度の急速な高まり、さらに政府主導の「GIGAスクール構想」や2021年9月に「デジタル庁」が設置されたことによる効果を期待して、今後入学してくるであろう新入生の苦手意識や「使いこなせない意識」が次年度以降、どのような傾向で変化していくのかをさらに継続調査し検討していく必要があると考える。

謝辞 本調査実施にあたり、多くの協力をいただいた駒沢女子大学および文化学園大学の情報科目担当の教職員ならびに関係者の皆様にご心より感謝の意を表します。

「GIGAスクール構想」の実現ロードマップ（イメージ）

全ての授業で「1人1台端末」で
デジタル教科書をはじめとするデジタルコンテンツをフルに活用
教師の指導や児童生徒の学びを支援する観点から教育データを活用

多様な子供たちの資質・能力を育成するための個別最適な学びと協働的な学びの実現



<図16>

7 参考文献

- [1] 野村卓志, 原田茂治:「大学入学生に対する情報リテラシーのアンケート調査」, 大学ICT推進協議会年次大会論文集(2012)
- [2] 石川千温, 渡邊慎哉, 中村永友, 皆川雅章, 小池英勝, 梅田 充:「福岡県立大学人間社会学部新入生の入学時のコンピュータスキルとコンピュータリテラシー教育」, 福岡県立大学人間社会学部紀要, 2010, Vol. 18, No. 2, 121-141
- [3] 篠政行, スワット・チャロンニポンワーニッチ:「2010-2019年度新入学生の情報教育に関する意識調査」大学ICT推進協議会2019年度年次大会(福岡), TH1: 情報教育・プログラミング教育, [TH1-1] (2019)
- [4] 篠政行:「文科系2大学における2020年度入学生の情報教育の履修に関する意識調

- 査」駒沢女子大学研究紀要, 第27号, 95-106, (2020)
- [5] 高橋武則, C. スワット:「質問紙調査の計画に関する研究」文化女子大学研究紀要第21集, 347/360, (JAN, 1990)
- [6] 高橋武則, C. スワット:「質問紙調査の解析に関する研究」文化女子大学研究紀要第21集, 361/376, (JAN, 1990)
- [7] 「GIGA スクール構想の実現について」, 文部科学省, (登録:令和元年12月)
https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_00001.htm
- [8] 国立教育政策研究所:「OECD 生徒の学習到達度調査(PISA2018)」(令和元年12月3日発表)
<https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/index.html#PISA2018>

[9] 「Society 5.0 - 科学技術政策」, 内閣府
[https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/
index.html](https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html)

